

Title	グリゼットの栄光と悲惨
Sub Title	Splendeurs et misères de la grisette
Author	小倉, 孝誠(Ogura, Kosei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.3 (2006. 12) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	鷺見洋一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910003-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

グリゼットの栄光と悲慘

小倉 孝誠

フローベールの一通の手紙

一八四一年十一月、若きギユスターヴ・フローベールは故郷の町ルーアンを離れ、法律を勉強するためパリに居を構える。まもなく二十歳になろうとしていた。もともと文学肌の青年であるフローベールは格別法学に関心があつたわけではないのだが、当時のフランスのブルジョワ階級の慣習として、法律を修めることを両親から期待され、要請されたのである。ルーアンにも大学はあつたが、法学部は設置されていなかったもので、もつとも近い都市であるパリの法学部に登録したのだった。かならずしも勤勉な学生ではなく、試験に落第して家族を心配させたりもしたが、中等学校時代からの仲間と再会し、新たな友人たちと親交を結び、好きな文学の道で習作に励んだりした。

青年フローベールが一八四三年二月十日、友人エルネスト・シユヴァリエに宛てた手紙のなかにみずからの生活を語つた一節が読まれる。パリで学生生活を送ることは素晴らしいと述べつつ、他方では、学生と異なる同世代の青年層が存在し、まったく違った生活スタイルを享受していることをいくらか苦々しげに指摘してみせる。

セーヌ河の向こう側には、自家用馬車を乗り回し、一年に三万フラン使える若者たちがいるのに、学生は徒歩だし、せいぜい辻馬車に乗れるだけだ。辻馬車だと、今日のような雪の日は足以外は全身ずぶ濡れになってしまう。向こうの若者たちは毎晩オペラ座や、イタリア座や、夜会に足を運び、美女たちと微笑みを交わす。その美女たちたるや、われわれ学生が脂じみたフロックコート、三年前にあつらえた燕尾服、小ぎれいなゲートルを纏って姿を見せようものなら、守衛をつかつてわれわれを門前払いすることだろう。われわれの晴れ着は彼らにとつては普段着にすぎないんだ。彼らは「ロシエ・ド・カンカル」や「カフェ・ド・パリ」で夕食をとる常連だが、陽気な学生のほうはパリの店でたつた三十五スーの食事で腹を満たすというわけさ。彼らは侯爵夫人や高級娼婦とベッドを共にできるが、おふざけ者の学生は手の赤切れた店の売り子と恋をするか、時々娼家に行つて女をかうぐらいだ。哀れな学生だつて、彼らと同じように欲望はあるからね。でも僕もそうだが、高くつくからそれほど頻繁に娼家に足を運ぶわけじゃない。それに仕立屋、靴屋、家主、本屋、学校、門番、カフェ、レストランの支払いはあるし、やがてまたブーツや、フロックコートや、本や、煙草を買わなきゃならないし、授業料や家賃も納める。あとは何も残らず、気苦勞ばかりだ。まあそれでも、パリで法学を修めるのはとても楽しいことさ。

フローベールはここで、七月王政下のパリで暮らす青年層をふたつのカテゴリーに截然と分けている。その差異は地理的、経済的、社会的に示される。一方は「セーヌ河の向こう側」、つまりセーヌ右岸の商業・娯楽施設が集中する地区に居を構え、他方は、セーヌ左岸の学生街に住む。一方は裕福で自家用馬車を所有し、他方は質素で、乗るのは辻馬車ぐらい。一方はパリの有名レストランで豪華な食事をし、オペラや劇場に足繁く通う暇に恵まれているが、他方はつ

つましい食事で餓えをしのぎ、屋根裏部屋で勉強にいそしむことを余儀なくされる。両者のコントラストは恋愛と性生活にまで及ぶ。「彼ら」は上流階級の貴婦人や高級娼婦を相手にできるが、「われわれ」はせいぜい店の売り子を口説くぐらいで、ときには売春宿で性欲を鎮めるだけだ。

親しい友人に宛てた二十一歳の若者が書いた手紙だけに、原文にはかなり露骨な表現が散見されるし、現実をことさら誇張しているという側面も否定できない。「彼ら」と「われわれ」の境界線はまったく乗り越えがたいものではなく、実際には両者のあいだに浸透性があったことも付言しておこう。また、このふたつのどちらにも属さないグループとして、駆け出しの画家や音楽家や作家、売れないジャーナリストなどからなる「ボヘミアン」の存在も無視できない。さらに数からいえば、労働者や職人の子どもたち、つまり上流階級や大学とはまったく無縁の青年たちが多数を占めていたことを忘れてはならない。いずれにしてもここで若きフローベールは、同世代の若者たちがけっして一様な集団ではなく、社会的に多様な様相を呈していたことを明らかにしている。

「彼ら」は「黄金の若者たち *la Jeunesse d'or*」と呼ばれた裕福で恵まれた道楽者たちの集団であり、「われわれ」はパリ南部のカルチエ・ラタンに住んでいた「学校の若者たち *la Jeunesse des Ecoles*」と通称された集団である。どちらも貴族（革命後に落ちぶれた貴族を含めて）とブルジョワジーの出身者がおもな構成要素であり、その意味で出自に階級的な断絶はない。両者の垣根が越えがたく、まったく交流のないふたつの世界が敵対関係のなかで並存しているかのよう
にフローベールが語るのには、少し事実を歪曲していることになる。

「学校の若者」がいつか「黄金の若者」に変貌する可能性は拓かれていた。実際、たとえばバルザックの『ゴリオ爺さん』（一八三五）の作中人物ラスチニヤックのように、カルチエ・ラタンのうらぶれた下宿で暮らしながら法律の勉

強をした青年が、やがて裕福なブルジョワ女性を愛人にしたり、貴族の邸宅への出入りを許されるようになったりしたのだ。あるいは同じくバルザック作『あら皮』（一八三二）の主人公ラファエルにしても、没落した地方貴族の息子で、父親の死後は学生街の粗末な下宿屋で清貧に甘んじながら、見知らぬ伯父の遺産が転がりこむことよって、フォブール・サン・ジエールマンに贅沢な邸宅を構えるにいたる。バルザックの世界では、そうした社会上昇の力学が物語に固有のダイナミズムを付与する。

政治的、イデオロギー的に言うと、「学校の若者たち」は社会主義や共和主義への親近性が強く、権力に対する異議申し立てや革命の担い手として立ち現れることが多い。普段はかならずしも勤勉でなく、舞踏会やカフェに入りびたりながらも、社会正義の意識は高く、政治行動に出ることを厭わない。ユゴーの『レ・ミゼラブル』（一八六二）に描かれた一八三二年の共和派の叛乱、フローベール作『感情教育』（一八六九）で語られている二月革命の挿話では、いずれもそうした若者たちが歴史を突き動かす主体となる。歴史家ミシュレは必ず『学生』（一八四七、死後出版）と題された著作のなかで、そのような青年たちへの期待を熱く語っていた。

学生、「学校の若者」。現代であれば、二十歳前後の若者の多くは学生であり、学生の身分を享受するというのはかならずしも恵まれた特権ではない。高等教育の大衆化によつて大学の門戸が広くなった現代では、学生という集団が文学表象のレベルで特殊な地位をあたえられることはないのだ。しかし十九世紀前半のフランスでは、かなり事情が異なる²。この時代、学生数はきわめてかぎられていた。学生であるということはすでに特権的な身分であると言えたし、実際の多くはブルジョワ階級の出身だった。フローベールのように多くは地方出身で、カルチエ・ラタンに部屋を借り、普段はつましい生活を送り、法学部か医学部に登録して将来は弁護士や医者をめざす——それが当時の学生の平均的な

イメージである。

グリゼットの肖像

こうした学生たちの恋とアヴァンチュールの相手になったのが、グリゼット *Grisette* と呼ばれた女性たちだ。グリゼットとは「お針子」と訳されたりするが、庶民階級の家庭に生まれ、自宅あるいは小規模な作業場での縫製や小売り関係の仕事にたずさわっていた若い女性たちを指す。冒頭に引用したフローベールの手紙に「店の売り子」とあったのがそれに当たる。もともとは粗末な素材で織られた灰色 *gris* の衣服を意味するが、転じてそれを身につけていた女性を指し示すようになったのである。学生とグリゼットと言えば、ロマン主義時代のパリの社会と文化を語るに際して無視しがたいカププルであり、文学的言説のなかで繰り返し論じられたテーマだった。

グリゼットに関しては、十八世紀末パリの網羅的なパノラマとも言うべきメルシエの『タブロー・ド・パリ』（一七八一—一八八）で、すでに一章割かれている。その冒頭で、著者は次のような特徴づけをおこなっている。

生れにも財産にも恵まれていないので、暮しをたてるためにはどうしても働かざるをえず、手仕事だけを生活の支えとしている若い娘たちは、お針子と呼ばれている。婦人帽仕上げ、裁縫、下着作りなどの仕事をする女たちのことで、この階級〔下層民〕の中ではもともと大きな部分を占めている。これら下層民の娘たちは、その仕事により生活の資を得なければならず、十八歳にもなると、貧しい両親から別れて、自分で自分だけの部屋を借りて、そこで気ままに暮している。いくらか裕福なブルジョワ家庭の娘には縁のない特権である。³⁾

みずから働いて生計を立てること、親元を離れての一人暮らしで、そのぶんブルジョワの娘にはない自由を謳歌できること——メルシエは早くもグリゼットの本質をすっかり把握している。そして貧しさと若さゆえに貞操が危機に晒され、男の囲い者になる例が多いことにも気づいていた。彼女たちの慎ましい収入にたいしてさえ国家が課税し、その結果、貧困を抜け出せないグリゼットたちの未婚状態を恒常化させているのは、立法上の重大な欠陥であるとメルシエは慨嘆する。彼が言うように、自由なお針子がそうでないブルジョワ娘よりも幸福かどうか、にわかに首肯しがたいところだが、グリゼットの存在を社会・経済的に位置づけてみせたのは、作家の慧眼である。

しかし歴史的な観点からすれば、グリゼットが大きな脚光を浴びて、一定の社会的な機能を果たしたのは十九世紀前半のことだ。

この時代、「生理学」というジャンルが一世を風靡する。多様な社会階層の習俗と、さまざまな職業につく人々の姿を叙述したジャーナリスティックな言説である。同時期に体系化されつつあった博物学や植物学の分類法に倣って、諸々の人間類型とその風俗を、歴史的な分析とユーモアあふれる逸話をまじえながら記述していくというスタイルをとる。同時代の有名人たちを寄稿者として迎え、ガヴァルニ、グランヴィル、ドミエらの版画がページを飾り、ときには十巻以上にもわたる浩瀚な著作物であった。『パリあるいは百一の書』（全十五巻、一八三一—三四）、『フランス人の自画像』（全九巻、一八四〇—四二）、『パリの悪魔』（全二巻、一八四五—四六）、そしてエドモン・テクシエ『タブロー・ド・パリ』（全二巻、一八五二—五三）などがその代表作になっている。

この「生理学」ジャンルではグリゼットが不可欠の項目であり、そこでは彼女たちの属性と性格が具体的に叙述される。

まず年齢。もともと初期のシリーズ『パリあるいは百一の書』で「パリのグリゼット」を執筆したエルネスト・デブレによれば、グリゼットの年齢には限定がある。「彼女には定まった年齢がある。十六歳未満ではありえないし、三十歳以上でもありえない。十六歳未満はまだ小娘だし、三十を過ぎれば普通の女である。グリゼットという名称は、このふたつの年齢の間にある場合にのみ適用される¹⁾。ルイ・ユアールはそのもとも体系的な『グリゼットの生理学』（一八四一）のなかで、やはり十六歳から三十歳までとしている⁵⁾。要するに、グリゼットは若い女性でなければならぬ。

ユアールと、『フランス人の自画像』第一巻に「グリゼット」の項目を寄稿したジュール・ジャンンは、グリゼットをきわめてパリのな現象とみなす。ボルドーやストラスブールにも同じような仕事にたずさわり、その地方固有の美しさを備えた娘たちはいるが、「若く、陽気で、みずみずしく、ほっそりして、繊細で、粋な⁶⁾娘は首都にしか見られない。それは外国の都市やフランスの地方都市ではなく、パリという都市空間においてのみ咲き誇る美しい花にほかならない。住むのはおもにパレロワイヤル界限（繊維関係の業者が多かった）か、家賃の安いカルチエ・ラタンである。

他方で、グリゼットはまっとうな労働者である。結婚するまで両親の膝下に留まる、あるいは留まらざるをえない貴族やブルジョワの娘と異なり、彼女は経済的に自立した女性なのだ。小売店に勤める者もいるが、おもに繊維、縫製関係の仕事に就いて、自宅あるいは小規模の作業場で働く。自宅の場合は、請負仕事をもちょうとということである。大きな繊維工場で単純な機械労働に従事することはない。針仕事で何かを製造するというのは熟練と経験を必要とする仕事なので、当時の女性労働者にとっては名誉ある職業だった。仕事は丁寧で、質が良く、彼女たちが作った衣服や、手袋や、レースや、アクセサリーは、パリの上流階級の女性たちを飾ったのである。そして上流階級の女性たちと接するおかげで、他の女工たちと較べてグリゼットは上品で（ジャンンは繊細で粋、と形容した）、言葉遣いが洗練されていたとい

う。

しかしながら、給料はけっして高くなかった。一日の報酬は四十スーほど、年間所得にして約五五〇フランにすぎない。家族と同居している場合はそれで問題ないが、グリゼットは多くの場合一人暮らしたから（孤児、捨て子のケースも多い）、この収入ではかなり厳しい。先に触れたデブレは、パリで若い女性がひとり暮らしの生活費を計算したうえで、不足分は年上の「旦那」に援助してもらうことになるだろうと仄めかす。そういう例もあったろうが、誤解してはならないのは、グリゼットは常習的にそのような行動に出たわけではなく、生活費の基本はみずからの労働で稼いでいたのだから、彼女を娼婦の一類型とみなすのは不適切である。グリゼットと売春のあいだには、明確な境界線を設けるべきなのだ。

ジャンンによれば、グリゼットは早起きで、清潔好きで、屋根裏部屋のバルコニーには鉢植えを置いて栽培し、貧しいが身だしなみには注意を払う。働き者で、怠惰という悪徳とは無縁な娘たちである。⁷⁾

このように見ると、「生理学」の言説では、少なくとも七月王政期の前半においてグリゼットはきわめてポジティブな相貌を付与されていたことが分かる。文学作品のなかにその対応物を探すとなれば、ウージェーヌ・シュー作『パリの秘密』（一八四二―四三）に登場するリゴレットであろう。

七月王政期のパリ下層社会を描いたこの新聞小説のなかで、リゴレットはもつとも魅力的な作中人物のひとりである。セーヌ右岸の場末タンブル地区に位置する建物の一室に住むこのグリゼット（シュー自身、彼女を形容するためにこの言葉を使用している）は、自宅で縫い物の請負仕事をして生活の糧を得ている。作品の主人公ロドルフに告白するところによれば、母子家庭に生まれ、母親の都合で一時期は孤児院に入れられ、やがて母親が死ぬと子どものいない親切な

隣人夫婦に引き取られた。育ての親がコレラ（一八三三年にパリを襲ったコレラ）で亡くなり天涯孤独の身になると、浮浪者として数年間監獄で暮らした（当時、「浮浪」は軽犯罪だったから）。家族の欠落、孤独、社会からの疎外を経験したりゴレットの少女時代は、いかにも大衆的な新聞小説の構図にふさわしい。

彼女の肖像は次のように描かれている。

リゴレットは十八歳になるやならず、中背というよりむしろ小柄だが、スタイルがよく、上半身が優雅に反りかえっていて、胸と腰はそるるように丸みをおびていた。それが彼女の敏捷で目立たない歩き方によく合っていたので、申し分ないほどだった。もう少し背が高ければ、それだけで彼女の上品な雰囲気は失われていただろう。（中略）彼女は歩いているというより、敷石に軽く触れているだけのように見えた。敷石の表面をすばやく滑っていたのだ。⁽⁸⁾

コルセットを着ける必要もないほどほっそりと魅惑的なウエスト、白いうなじ、波打つようにしなやかな物腰。庶民に生まれ、パリの場末で育ち、みずからの額に汗して生活するリゴレットの身体には、民衆性を想起させるようなものがない。それは、たとえばバルザックが描いた上流階級の無為で優雅な女性の身体に類似している。当時の文学において、作中人物の身体は階級性を強く刻みこまれる表面であったことを考慮するならば、彼女の身体はきわめて例外的なのである。

それだけではない。リゴレットは隣人の不幸に熱い涙を流し、困窮している仲間には乏しい家計のなかから金銭的な

援助をし、いつも陽気で清潔、飼っている小鳥たちとともに歌を口ずさむ。パリの街路の娘である彼女は、田舎の静けさよりも首都の喧騒を好み、多くのグリゼットと違って、郊外の田園地帯を散策するよりもパリのなかを歩き回ることを愛する。絵のモデルを務めたり、庶民のダンスパーティーに出かけることはあるが、身持ちは良くて金持ちの誘惑に屈することもない。そして最後は、ブルジョワ青年フランソワ・ジェルマンと結婚するという、グリゼットとしては稀な運命を勝ち取る。

リゴレットはみずからの出身階級を否定しないが、結果的に階級的な上昇を遂げる。やさしく、善良な性格で、堅実で、健気で、美しい彼女は、たしかに幸福になるべきあらゆる資質に恵まれていると言えよう。その相貌がいくらか理想化されているのは、社会主義思想に共鳴し、民衆の社会的復権を志向した作家シューの意図が投影されているからである。

カルチエ・ラタンの恋物語

十九世紀前半のパリで学生と言えばグリゼットとの恋、グリゼットと言えば学生との恋がたちまち話題に上るほど、両者の繋がりは強い。学生にとってグリゼットだけがアヴァンチュールの相手ではないし、グリゼットにとって学生は潜在的な恋人（ないしは愛人）のひとりにすぎない。それにもかかわらず二人の恋物語が作家やジャーナリストたちよって郷愁の念とともに語られたのは、未熟であるがゆえに純粹で打算のない愛を生き、未来を考えられなかったがゆえに現在を濃密に生きようとした若い男女の、詩情と悲哀に満ちたロマンスだからである。学生とグリゼットの出会いと別れは、ロマン主義的な愛の風土を鮮やかに彩る。

實際、学生とグリゼットは容易に知り合う運命にあつた。どちらも多くはカルチエ・ラタンに住み、しかも部屋代の安い上層階や屋根裏部屋を借りる。隣人どうしだったり、恣越しに姿の見える状況にあつたのだ。勉強や仕事が開する空間も近接している。どちらにとつても週末の気晴らしといえ、パリ郊外のピクニックや、プラドやグランド・シヨミエールなどで催される大衆的な舞踏会や、芝居である。生活と娯楽の空間が同じであり、年齢的にも同世代である彼らが出会うことには何の不思議もない。

生理学の言説では、例外なく学生とグリゼットの交流が話題になる。『フランス人の自画像』では、第一巻の冒頭で「グリゼット」の章と「法学部の学生」の章が前後して配列されているくらいで、両者の近親性が際立つ。そこでは、二人の関係が「愛と儉約と労働にもとづく率直な共同体」と規定されている。平日はお互いに仕事や講義や勉強で忙しいが、日曜日ともなればモンモランシーやサン・ピエールの田舎でピクニックに興じ、冬は劇場やダンスホールに足繁く通う。また週末には、部屋に友人たちを招いてダンスや歌で楽しむのが好きで、それが時には夜を徹してのどんちゃん騒ぎに変貌することがあるので、門番からは白眼視される。

同棲してしまつと、男は女を恋人というより召使いのように扱うことも稀ではなく、女のほうも男に尽くそうとする。しかし、二人の関係が永続化することは稀だし、学生とグリゼットが結婚することはそれ以上に稀である。

この束の間の関係を断つのが夏休みだけであれば、そして女が一時的な夫に泣きながら別れを告げて、彼が休み中は手紙を出す約束してくれるのなら、彼女は幸せなほうだ！ しかし恩知らずな学生のほうはしばしば同棲に倦み、自由を取り戻そうと考える。そして女に喧嘩を売り、浮気性だとなじり、あらかじめ揉め事を何度も起こし

たうえで決定的な別離に至る。彼の後釜になるのは友人のひとりだ。そして不幸な娘のほうは手形のように、あるいは質屋の質札のように人の手から手へと渡り、最後は老いて色香が失せ、やがて頹廢の最終段階にまで落ちていく。⁽¹¹⁾

グリゼットは学生との恋を夢見る。同じ階級の労働者や職人は教養に乏しく、しばしば酒飲みで暴力を振るうから、ロマンチックで文学的な恋愛を望む彼女は、洗練されたブルジョワの学生と付き合うのだ、と生理学の著者たちは言う。そして棄てられればまた別の男との出会いを求め、恋の相手には操を立てようとする。結婚しなくても、結婚できなくとも、彼女が相手に求めるのは真実の愛とやさしい心遣いであり、学生はその欲求をある程度まで満足させてくれる。グリゼットは、金銭やもので誘惑しようとする男たちには激しい嫌悪を隠さない。「若いグリゼットは恋をしてい

る時、けつして打算に引きずられることはない。彼女はみずから相手に身を任せるのであつて、けつして自分を売ることはない⁽¹²⁾」とルイ・ユアールは断言し、「グリゼットは相手に大切にされたいと思つていただけだ⁽¹³⁾」とテクシエは述べる。裕福な男の囲われ者となれば、グリゼットはもはやその名に値せず、「ロレット」へと墮落していく。

このような若い男女の關係は確かに道德的には称賛されえないし、社会的にも響響をかつた。未婚の女性の妊娠や出産、望まぬ子の殺害（嬰兒殺害は女性に多い犯罪だった）、絶望、自殺など、一見お氣輕な恋愛が破局した後には悲劇が待ちかまえていたからである。だが他方で、こうした關係が必然的に導き出され、暗黙のうちに許容されるに至つたのには、それなりの社会背景が浮かび上がってくる。地方から首都にやつて来る学生は十九世紀をつうじて増え続け、彼らは一人暮らしの自由を満喫し、大都市が提供するさまざまな楽しみと可能性を享受しようとする。しかし、その自

由と可能性は孤独や寂しさと表裏の関係にあった。

彼らは愛と官能の悦びを求める。その相手はどこにいるのだろうか。当時の大学は男たちの世界であつて、女子学生は存在しない。親と同居していて女中がいれば、その女中がしばしば性のイニシエーションの相手をしてくれたが、屋根裏部屋にひとり住む学生にはそれも不可能である。娼婦相手に情欲を満足させることはできようが、生活費の乏しい学生にはそれも頻繁にできることではない。状況をさらに複雑にしたのは、同じブルジョワ階級に属する娘たちとの交際がきわめて限られていたという事実だ。未婚のブルジョワ女性にあつては、何よりも純潔と処女性が重視され、家族や親戚以外の男性と出歩く自由さえ極度に制限されたいた。学生からすれば、同じ階級に属する未婚の女性は遠くから眺める対象であり、舞踏会や夜会など儀礼的な空間でしか接触できない。たとえ相愛の相手がいても、結婚前に性交渉をもつことなど論外だつた。

こうした状況で、グリゼットは理想的な恋の相手であり、快楽の提供者と言えるだろう。仕事を持ち、生活費をみずから稼ぐ彼女は経済的な負担にならないし、身の回りの世話に配慮してくれる。青年にとっては愛とセクシュアリティの通過儀礼をおこなってくれる相手である。恋人であり、娼婦であり、同時に母親。卒業して弁護士や、ジャーナリストや、医者などになり、社会生活のなかに組み込まれていく前の過渡期にあつて、グリゼットはいわば重宝な女性だつたということになる。

東の間の同棲は道徳家や慈善団体の眉を顰めさせたが、ブルジョワジーがそこに重大な危険を看取していたようには見えない。グリゼットは学生の感情教育と性教育を引き受けてくれるようなものであり、青年にとっては大人になるための通過儀礼と位置づけることさえ可能だ。しかもグリゼットはたとえ望んでも学生と結婚することはできず（学生は

ブルジョワの娘と結婚する)、いずれは別離の時が来るから、親から見れば息子が愚かしい身分違いの結婚に迷いこむこともない。民衆の血が自分たちの家系に侵入してくる脅威は避けられるのだから、ブルジョワ的な家庭秩序と、それに依拠する社会秩序は保護されるというわけである。学生とグリゼットの恋という、このうえなくロマン主義的で、牧歌的で、甘い恋愛の構図の背後には、いささか散文的で酷薄な現実が横たわっていた。

グリゼットの文学的表象

学生とグリゼットの恋模様を論じる際の障害のひとつは、男の側からの証言しか残されていないことだ。生理学の著者は男性だし、これから触れる文学作品の作者もすべて男性である。恋愛に関するかぎり、男と女ではしばしば感じ方が違うから、本来であれば両者の主張を等しく斟酌しなければ真実は掴めない。ところがグリゼットはきちんとした教育を受けていないから、ほとんど字が書けず、したがって自分の体験を語った証言を残していない。学生にとってはお手軽で、後腐れのない恋愛の相手にすぎず、最後は男に棄てられ、惨めな境遇に陥ってしまうというのは、実際にそのような例があったにしても、多分に男たちの視線と論理が生み出した神話という面が強い。グリゼットにとっては学生だけがアヴァンチュールの相手ではなかったし、彼女たちは自分なりにたくましく生きていたに違いないのだ。

そのことを念頭に置くと、同時代の文学で描かれるグリゼットの表象の多様性がよく理解できる。そこには共通項が読みとれると同時に、彼女たちの肖像がさまざまに変化づけられている。

ユゴー作『レ・ミゼラブル』は出版されたのは一八六二年だが、ファンテーヌがグリゼットとしてパリで暮らすのは王政復古期の一八一七年のことだ。地方に生まれた孤児で、そもそも誰が親だったのかも定かでない彼女は、しほら

く農家で雑役についた後、パリにやって来る。真面目で、無垢で、生きるため懸命に働く彼女は、仲間のグリゼットたちのように陽気でもないし、軽佻浮薄でもない。その彼女が愛した相手は学生のトロミエス。カルチエ・ラタンでの生活が長い彼にとつて、ファンティーヌとの恋は他の女たちとの付き合いと同一程度のものであったが、彼女にとつては違つていた。「ファンティーヌの恋は初恋であり、唯一の恋であり、一途な恋だつた⁽¹⁴⁾」と作家は書き記す。やがて彼女は妊娠するが、トロミエスのほうは彼女を棄てて故郷に帰つてしまう。生まれたコゼットの養育費を稼ぐため彼女が工場で働き、そこを解雇されてからは娼婦にまで落ちて、最後に結核で死ぬことは周知のとおりである。

哀れな末路だが、彼女は子どもへの愛によつて靈的に救済される。母となつた女性はもはやグリゼットたりえないが、ファンティーヌの行動は母性ゆえに免罪され、悲劇的な状況のなかで威厳をおびる。生理学においても、ユゴーの小説においても、王政復古期のグリゼットには何かしら崇高な気配がたただよう。

ミュッセのふたつの短編小説『フレデリックとベルヌレット』（一八三八）と『ミミ・パンソン』（一八四六）は、七月王政期のグリゼットの姿をあざやかに映し出す。後者は先にあげた『パリの悪魔』に収められた作品で、生理学との精神的な類縁性が明らかである。どちらもカルチエ・ラタンを舞台にした、学生とグリゼットのあいだで繰り広げられる物語である。

『フレデリックとベルヌレット』は、このテーマをめぐるロマン主義的な神話の要素をすべて包含している。主人公は地方（ブザンソン）から上京して法律を学ぶ学生である。ラ・アルプ通りに住み、初めはまじめに講義を聴き、放蕩に耽らず、試験では良い成績を収めて、故郷の両親を喜ばせていた。三年後、あとは論文さえ仕上げれば弁護士資格を取得するまでになつた。そのような時、向かいの建物の同じ階に住む若い女性と目があう。こうして通り越しの言葉

を伴わない視線のやりとりから始まり、やがて街中や公園で逢瀬を重ねるようになる。当時ベルヌレットはある男と暮らしていたのだが、その男と別れてフレデリックとの愛に生きたいと願う。さまざまな波乱や紆余曲折を経て、二人は一時期いっしょに暮らし、幸福な月日を過ごす。しかし女に裏切られていたと思つたフレデリックは傷心を抱えたまま、父親のついでスイスに外交官の職を得て赴任し、そこでイギリス人女性ファニーと出会つて結婚する。その直後に届いたベルヌレットの手紙のなかでは、彼女がフレデリックの父に頼まれて別れる決心をしたこと、悲しみのあまりみずからの命を絶つこと、そして唯一の楽しい日々をあたえてくれた恋人への感謝の言葉が述べられていた。

女が男の父親に説得されて恋を諦めるというのは、後年のデュマ・フィス作『椿姫』（一八四八）のマルグリットとアルマンの関係を想起させる状況設定である。学生たちのボヘミア的な生活、遺産で裕福になつた学生の放恣な生活、パリ郊外サン・クルーでの散策、「グラランド・シヨミエール」やオペラ座の舞踏会、ヒロインの哀れな境遇（貧困、両親と兄からの虐待と搾取、十六歳で金持ちの老人の囲い者にされたこと）、そしてその寂しい死。『フレデリックとベルヌレット』には、学生とグリゼットの恋を特徴づける典型的な説話空間とエピソードがふんだんにちりばめられている。

「グリゼットの横顔」という副題をもつ『ミミ・パンソン』の眼目は、学生とグリゼットの恋を語るのではなく、グリゼットの性格を際立たせることにある。

地方出身の医学生ウージェーヌは十九歳、両親の仕送りですつましく暮らす真面目な学生である。グリゼットは「危険で、恩知らずで、墮落した特殊な女たちで、わずかばかりの快樂の見返りに、いたるところ悪と不幸をまき散らすために生まれた女たち」⁽¹⁾だと、彼は確信している。友人でやはり医学生のマルセルは、ウージェーヌがグリゼットにたい

して抱いている先入観を払拭させようとして、ある晩、自分の部屋にミミ・パンソン（下着縫製工）を招き、言葉巧みにウージェーヌを同席させる。ミミは仲間たちとの陽気で楽しい日々や、ときたま学生たちを交えておこなう食事やピクニックについて屈託なく語る。

翌朝帰りがけに、ウージェーヌは道で衰弱しきった若い女とすれ違い、彼女から手紙をポストに投函してくれるよう頼まれる。病気が餓えか、女はほとんど歩くことさえままならない。同情と不安に駆られた彼は、思わず投函する前にその手紙を読むのだが、その書き手はミミの友人ルジェットで、困窮した彼女がかつての恋人のさる男爵に金の無心をする文面だった。彼は早速そのことをミミに知らせる。ミミは自分のドレスを質屋に入れて金を工面し、みずからは部屋の粗末なカーテンを衣服替わりに教会のミサに出かけて行くのだった。やがて男爵から金が届くと、二人のグリゼットは高級レストランで飲食に費やし、将来に備えるようすもない。その無分別さに呆れるウージェーヌに、マルセルは貧しく刹那的で、一時の快楽を享受するグリゼットたちへの寛容を説くのだった。

この作品では、グリゼット物語に通例の学生との恋は語られていない。ミミとルジェットが時には学生とのアヴァンチュールを楽しむことは示唆されているが、作品の主要な意図はグリゼットの性格と行動様式を描くことにある。下着の縫製で暮らしを立てているミミは貧しくしはしは空腹だが、いつも屈託がなく、仲間にたいしては友情に篤く、自己犠牲を払ってまで窮状から救ってあげようとする。彼女たちの性情と行動様式に詳しいマルセルはウージェーヌに向かつて、グリゼットを次のように擁護してみせる。

第一に、恥じらいと謙虚のためになくはならない衣服を一日中作っているのだから、彼女たちは貞潔だ。第二

に、お客にはいていな言葉遣いで話すよう雇い主からかならず言われるから、正直者だ。第三に、彼女たちは常に下着や布地をあつかい、給金が減らないよう大事にするから、グリゼットはとても細やかで、清潔だ。第四に、彼女たちは果実酒を飲むくらいだから誠実だ。第五に、一日三十スー稼ぐのに苦勞するくらいだから、彼女たちは儉約家で、質素だ。うまいものを食べて散財することがあるとすれば、それは自分が稼いだ金じゃない。第六に、彼女たちの仕事は一般に死ぬほど退屈で、仕事が終われば水を得た魚のように跳びはねるから、とても陽気だ。¹⁶

そのうえ、グリゼットは口数が少なくて煩わしくないし、小綺麗にするが衣服や靴のために過度の浪費などしない。恋に落ちれば情が濃く、相手に尽くすだけに、失恋するとセーヌ川に身投げしたり、高い建物の窓から飛び降りたりする。矛盾や、一貫性の欠如も含めて、ミュッセの短編はグリゼットをめぐる公約数的な要素の一覽表を作成したような感がある。若く、陽気で、屈託がなく、仲間には同情的、他方でその日暮らしを抜け出ることが難しく、将来設計を立てることができない。単なる小説的なポートレイトを超えて、ここでは社会学的な特徴づけが素描されているのだ。

社会的に言えば、グリゼットの全盛期は一八三〇年代だった。文学の世界ではその後も生き延びて、たとえばミュルジェール作『ボヘミアンの生活情景』（一八五一、プッチーニのオペラ『ラ・ボエーム』のミミやミュゼットとして形象化されている。そこにはグリゼットの性格と行動をめぐる既成の言説が織り込まれているのみで、新たな展開は見られない。そして一八四〇年代から五〇年代にかけて、グリゼットと入れ替わるかのようにカルチエ・ラタンの恋愛風俗に登場してくるのが「ロレット」と呼ばれた高級娼婦だが、それはまた別の主題である。

注

- (1) Gustave Flaubert, *Correspondance*, «Pléiade», t.I, 1973, p.143.
- (2) 十九世紀前半のパリの学生の實態については、次の著作が詳しい。Jean-Claude Caron, *Généralions romantiques. Les étudiants de Paris et le Quartier latin(1814-1851)*, Armand Colin, 1991.
- (3) Louis-Sebastien Mercier, *Le Tableau de Paris*, La Découverte, 1985, p.164. 訳文は次の邦訳による。メルシエ『十八世紀パリ生 活誌(上)』、原宏訳、岩波文庫、一九八九年、二〇一頁。
- (4) Ernest Desprez, «Les grisettes à Paris», *Paris ou le Livre des Cent-et-un*, Ladvocat, t.VI, 1832, p.216.
- (5) Louis Huart, *Physiologie de la grisette*(1841), Stakine Reprints, 1979, p.12.
- (6) Jules Janin, «La Grisette», *Les Français peints par eux-mêmes*, Curmer, t.I, 1840, p.9.
- (7) *Ibid.*, p.9.
- (8) Eugène Sue, *Les Mystères de Paris*, Robert Laffont, 1989, p.457.
- (9) シューと社会主義の關係については、小倉孝誠『「パリの秘密」の社会史』(新曜社、二〇〇四年)、第四章を参照願いた
す。
- (10) Jules Janin, *op.cit.*, p.10.
- (11) *Ibid.*, p.18.
- (12) Louis Huart, *op.cit.*, p.47.
- (13) Edmond Texier, «Les grisettes et les lorettes», *Tableau de Paris*, Inter-Livres, s.d., t.II, p.54.
- (14) Victor Hugo, *Les Misérables*, Garnier, t.I, 1963, p.156.
- (15) Alfred de Musset, *Mimi Pinson*, dans *Œuvres complètes en prose*, «Pléiade», 1951, p.730.
- (16) *Ibid.*, p.732.